町史とっておきの話 191

只見の森の恵み・渓流魚と釣り人

森林総合研究所　吉村　真由美

▲豊かな森は渓流の生き物を豊かに育んでいます

只見地域は渓流釣りのメッカの一つです。豊かな森の渓流にはりっぱな魚がたくさんいると期待して、毎年多くの釣り人が渓流にやってきます。

釣り人の動向を遊漁券購入者数などを基に調べてみました。バブル全盛期の頃の渓流はアユ釣りの人々がいっぱいでした。アユ釣りが下火になるとアユ以外の渓流釣り（イワナ・ヤマメ）が盛んになりました。現在の釣り人の数はピーク時よりかなり減っています。釣り人数の減少に伴い、稚魚の放流量もピーク時に比べてかなり減りました。現在の只見地区での放流は、ほとんどが田子倉湖に代表されるダム湖で行われており、渓流ではわずかしか放流されていません。以前は栃木県・群馬県・千葉県など県外からたくさんの釣り人が来ていますが、現在では半数以上（ダム湖で釣りをされる方は約4分の3）は福島県内からの釣り人です。そして、只見町在住の釣り人は少ないということも分かりました。

只見町の方々に好んで釣る魚種をお聞きしたところ、イワナ・ヤマメ・ウグイの順となりました。また、「釣りは食材を得るためではなく楽しみのため」という方が多いという結果を得ました。只見で渓流釣りを楽しむ人は、ほとんどが只見町以外の方であったので、彼らは地元の人以上に楽しみ（文化サービス）のために釣りをしていると考えられます。一方、「副食としての渓流魚は家族が釣ったものだけ」という世帯が半数程度いることが分かり、釣りは楽しみではあるが最終的に食材（供給サービス）になると考えられます。釣りをする23世帯のうち17世帯は魚が釣れなくなったと感じておられることも分かりました。また、その17世帯のうち8世帯は、区外からの遊漁者による乱獲で渓流魚(特にイワナ・ウグイ）が減ったと感じておられました。昔はどこでもたくさん釣れたそうですが、本当に魚は減ったのでしょうか。それを只見町の渓流で調査しました。

魚類の種類数が多かったのは小白沢・大滝沢・布沢川・田沢川でしたが、イワナしかいない渓流もありました。水生昆虫の個体数は多くても、魚の種類数や個体数が少ない渓流があり、餌不足のために魚の種類数や個体数が少ないのではないことが分かりました。また、老齢の広葉樹林面積の広い流域ほど魚類の個体数・種類数が少ないという私たちの期待とは逆の結果が得られました。さらに、小白沢・大滝沢・布沢川・田沢川ではイワナの個体数も比較的多かったのですが、全国平均と比べるとかなり少ないということも分かりました。放流稚魚の数と遊漁者数とのバランスがとれていないのかも知れません。また、流域の老齢の広葉樹林面積が広いと、イワナの個体数が減るという傾向が見られました。しかし、面積が広いと、大きなイワナが生息しているということも分かりました。老齢の広葉樹林面積が広い流域では、大きい淵が存在するなど渓流環境が多様になるので、大きなイワナが釣られず生き残れる空間も多くなると考えられます。一方、広い流域であるが故に、多くの釣り人が期待をもって入ってくるため、適度な大きさのイワナがたくさん釣られ、個体数が減ったのではないかと考えられます。

豊かな森は確かに生き物を豊かに育んでいました。しかし、森が育んだ豊かな恵みを釣り人が片っ端から搾取していったのでは、森の恵みはやがて尽き、享受できなくなるでしょう。人・鳥・獣などの捕獲圧の適度な管理が豊かな森の恵みにつながるのではないでしょうか。

▲蒲生川に生息していたイワナ